

No.12 置いてけ堀

本所といえば江戸時代には無数の掘割があった。掘割には、一年中フナや鯉は言うに及ばずうなぎやナマズが棲み、春先には鮎や白魚までが泳いでいた。数多い掘割の中でも、法恩寺橋から押し上につづく掘割は別名「置いてけ堀」と呼ばれていた。

釣れるのをいいことにうなぎや鯉をたらふく釣って、日暮れてからさあ獲物を持って帰ろうというと、川底からうめくような女の声。

「置いてけえ。その魚を置いてけえ。」

「な～に、かまうもんか、俺の釣った魚だい！ せっかく釣ったものを置いてってたまるかい。おいらぁ江戸っ子だ。怖いものなんだぁ無いんだぞ～。」

強がり言って立ち去ろうとすると、またも「置いてけえ」。それでも帰ろうとすると、バケツごと堀の中に引きずりこまれてしまう。こうなったら、「江戸っ子だい！」と強がりには言ってもらえない。ほうほうの体で逃げ出すのである。こうして、誰言うともなく、この掘割を「置いてけ堀」というようになつた。今では、水も汚れて川底の妖怪も窒息して死に絶えたが、かわって掘割に沿って立ち並ぶ風俗店の中から、黄色い声がする。



「さわった分、お金を置いてけえ～」